

森鷗外「魚玄機」論

——才女に向けられた二つの眼差し——

はじめに

森鷗外「魚玄機」は一九一五年七月、『中央公論』に発表された歴史小説である。同時期に書かれた歴史小説には、同じく女性を主人公とした「安井夫人」(『太陽』一九一四・四)、「山椒大夫」(『中央公論』一九一五・一)、「ぢいさんばあさん」(『新小説』一九一五・九)、「最後の一句」(『中央公論』一九一五・十)がある。これらの作品に描かれる女性は、共通して献身的、犠牲的精神の持ち主である。一方、本作品は殺人事件を起こした実在の晩唐の女性詩人を材に取っている。天賦の詩才と美貌を持った魚玄機は、初め「男子の心情」を有した志高い少女であった。しかし、女道士となった後に楽人陳某と愛人関係を結び、下女の緑翹に嫉妬心を燃やして殺害、処刑されるに至る。この女性像の描かれ方は、明らかに他の歴史小説と趣を異にしている。

鷗外が魚玄機という女性詩人に興味を持ったのは一九〇四年のことであるらしい。佐々木信綱から『唐女郎魚玄機詩』を贈られた鷗外の、二月九日付の礼状に「御寵贈之詩集今日一讀仕候其附録ヲ見レバ作者ハ別品ニテ女道士兼藝者ト云フヤウナ人物ナルニソレガ又

岡村 あずさ

嫉妬デ別品ノ女中ヲ毆チ殺シ獄ニ下リタリトアリ實ニ芝居ニデモアリサウナ珍事ニテ面白ク存候」とある。しかし、「魚玄機」が発表されたのは、この約十一年後である。この長い期間を置き、一九一五年という時期に突如作品化されたという点は注目すべきである。先行研究は、「魚玄機」を女性性欲の発現過程を描いたものとする論が基調となっている。特に、その主題が平塚らいてうから着想を得ているという斎藤茂吉の指摘は現在まで受けつがれている。

丁度そのころ、平塚明子さんが、花のやうな処女時代を通過して、忽然として悟入した感覚のことを自分の文章で告白してゐた。性欲学に於て飽和するほどの智識のあつた鷗外が、直ちにその告白に飛びついたのは極めて自然なことである。

(斎藤茂吉「鷗外と歴史小説」『文学』一九三六・六)

ここで茂吉がいうらいてうの文章とは『青轡』一九一五年二月号に掲載された「小倉清三郎氏に——性的生活と婦人問題」を読んでいる。以下にその一部を引用する。

私一個の経験を言つても性愛を経験してから所謂欲情と名づけるものの自分自身の中に表れてくる迄に五六年もかゝつて居ります。私は第一の恋に於ても、第二の恋に於てもさういふものに就いて全く何も知りませんでした。考へることも出来ない程、真に思ひもよらぬことだつたのです。そして今私は自分の恋愛の中から春的な欲望の生じてきたことを知つてゐます。併しこれについてはつきりした意識がもてるやうになつたのは極めて最近の経験に属してゐます。

これらを受けた尾形仿「鵬外「魚玄機」と、新しい女」たち性と文学への開眼の記録」（『国語国文』一九六三・十二）は、らいてうとの関連性にさらに踏み込み、「現代の、新しい女の、生きかたが、史実を支配し、史料はその現代の姿を隠蔽するための隠れ蓑の役割を果たしているにすぎない」と述べている。以来、「魚玄機のモデルⅡらいてう」という見方は踏襲されている。しかしこれらの論は、らいてうの「春的な欲望」ばかりに注目し、女性性欲についての問題を殊更に強調しているような印象がある。鵬外はただ女性性欲への好奇心で「魚玄機」を執筆したのであるか。むしろ、らいてうとの関連の中では論じられて来なかった（才女の悲劇）という結末にこそ、重大な意味があるのではないか。

本稿では、まず作品が一九一五年に執筆されたことの意味を探る中で、「魚玄機のモデルⅡらいてう」という見方が妥当であるか再検討し、そこに新たな一考察の提出を試みたい。そして、何が才女と悲劇とを結びつけるのか、鵬外が才女に向けた眼差しがどのようなものであつたのかを結論付けたい。

一 史料との比較から見える魚玄機像

「魚玄機」は『唐女郎魚玄機詩』、『溫飛卿詩集』が典拠となっている。^①これらの史料と作品を比較すると、物語の骨格は史料に忠実でありながら、悲劇の病根といえる玄機の成長過程には驚くべき創作のあとがあることがわかる。温庭筠については「歴史其儘」の態度であるのに対し、玄機については「歴史離れ」が著しいのである。李億の妾となつたにも関わらず肉体的交渉を激しく拒絶する点や、采蘋と「対食」（同性愛）関係にあつたとする点、また、中気真術という修行で性の喜びを知り「真に女子」となった点、そして楽人陳某という男に溺れていく点は、史料に根拠のない鵬外の創作である。采蘋や陳某に関しては、そもそも実在しない人物である。鵬外は、明らかに実在の魚玄機という人物像を忠実に再現しようとは意図していない。鵬外は魚玄機という人物を借りて、そこに何を示そうとしたのだろうか。まずは玄機の女性像がどのように創作されているか確認したい。

玄機は初め、「女子の形骸」を持ちながら、「男子の心情」、つまり詩人としての功名心を持つ少女として設定されている。「將に開かむとする牡丹の花のやうな少女」である玄機は、温庭筠を師に得てから「殆寝食を忘れる程」詩に没頭し、「詩名を求める念」がいよいよ高まつていく。その功名心ゆえ、「遊崇真觀南樓」の漢詩には、進士となれない自らの性別に痛恨の思いが込められている。また、李億の要求にあえばそれを拒絶、「強ひて逼れば号泣する」という有様である。しかし、女道士となり「追るべからざる規律の下に」「中気真術」を修した玄機は「忽然悟入」する。身体的に女性とし

て目覚めさせられ、「真に女子」となった玄機は徐々に変貌していく。

玄機は女道士仲間の采蘋と同性愛関係となるが、采蘋が「塑像を造つてゐた旅の工人」と失踪してからというもの、夜も眠らずに「目に涙を湛へて」いたり、「眉を蹙めて沈思」し、室内を徘徊して物を放下しなどするようになる。鵬外はこれを「玄機は求むる所のものがあつて、自らその何物なるかを知らぬのである」と説明するが、この「求むる所のもの」を埋めようとするかのように、玄機は楽人陳某に入れ込んでいくのである。温庭筠は、陳某と親しむようになってからの玄機の詩に、「閨人の柔情が漸く多く、道家の逸思が殆無いのを見て」不思議に思う。ここには玄機の女性性の成熟がはっきりと読み取れる。かつて「男子の口吻」であつた玄機が明らかに変貌を遂げているのである。なお、実在の玄機の愛人であり殺人事件を起こす発端をつくつたこの人物は、史料の方ではその正体が詳らかにされておらず、その名は「某客」として伏せられている。つまり、楽人としたのも、名を「陳某」としたのも鵬外の創作である。典拠の『唐女郎魚玄機詩』を丹念に研究した辛島驍は、『唐女郎魚玄機詩』にある「迎李近仁員外²⁾」という漢詩を引いて、実在の「某客」は李近仁という役人ではなかつたかと推測している。⁽³⁾鵬外がこの李近仁でなく、あえて陳某なる人物を設定したのは、やはり何か意図があつたと思われる。

次に、史料に依拠しながらも変更が加えられている点を見ていく。まず殺害場面である。史料の玄機は、百何十回と笞打つて緑翹を殺しているのに対し、鵬外はこの部分を削除、扼殺したとしている。前者は玄機を悪役として描こうとする意識が強く残酷性が強調されるが、後者は咄嗟のことによる事故という印象が強くなっている。

さらに、緑翹の容姿にも設定変更がある。史料には美しいとある緑翹を、「額の低い、頤の短い獨子に似た顔で、手足は粗大である。頰や肘はいつも垢膩に汚れてゐる」という具合に、醜く仕立てている。また、史料では緑翹と男との密通の可能性が否定出来ない形で書かれているのに対し、鵬外はこの密通はなかつたものとして、すなわち玄機の妄想であつたかのように書いている。緑翹を殺害した翌日、玄機が「あの緑翹がゆうべからゐなくなりましたが」といつて陳の顔色をうかがうと、特に意に介さない様子で「さうかい」とだけ返事をしたという描写を鵬外はわざわざ付け足している。これは陳と緑翹の関係を否定するものと読むべきだろう。これらの操作は、玄機の殺害をより愚かしく見せる効果があるのではないか。妄想に飲み込まれ、咄嗟に緑翹を殺した玄機の行動は衝動的で浅はかである。設定変更があることによって、狂信的、盲目的な玄機の印象を強めていると言える。

以上に見てきたように、玄機は初め、「男子の心情」を有した有望な少女であつた。しかし、中気真術によつて肉体的に目覚めさせられた玄機は、最早観念的な次元を超え、生物学的な成熟によつて女性性に引き戻されて破滅するのである。

二 鵬外―「新しい女」―魚玄機

本章では「新しい女」と玄機の類似点、関係性を確認していきたい。玄機は卓抜した才能を持ち、時代の中に埋没しない強い自己を持っている。そういった点で既に大正に活躍する「新しい女」の姿に重なりと言える。しかし、平塚らいてうと玄機の共通点はそのみでない。むしろ史実との相違部分、つまり性的成長の部分にこそ、

その類似点が見てとれるのである。先に引いたらいてうの「春的な欲望」の目覚めという体験もそうだが、先行研究で指摘されている通り、道観内で対食と揶揄された玄機と采蘋の關係が、らいてうと尾竹一枝との關係に符合する。一枝はらいてうよりも七歳年下の青鞥社社員である。二人は一時期、同性愛關係にあった。この關係はらいてうが奥村博史との愛に走ることと破綻するが、采蘋もまた、「趙の所で塑像を造つてゐた旅の工人が、暇を告げて去つたのと同時」に「忽失踪」する。二人と玄機、采蘋との類似は、改めて検証しても十分納得できるものである。さらに、玄機の愛人である陳某には、らいてうの夫となる奥村博史が投影されているように見える。らいてうの自伝「元始、女性は大陽であつた」(大月書店 一九七一・九)には、奥村と初めて会つた際のらいてうの印象が以下のように記されている。

骨太で、図抜けた長身に、真黒な長髪をまん中からわけた面長の青白い顔が、異様なまでに印象的な青年で、奥村博と名乗りました。よほど無口なたちらしく、みんなの話のなかに自分から口をいれようとはしません。といつて悪びれた態度はみじんもなく、黙つてみんなの話に耳を傾ける顔の表情の、軽くつまんだような上唇のあたりに漂う、あどけないほどの純良さが、わたくしにはひと目で好ましいものに思われました。

奇しくも、この描写は鷗外の書いた陳某の様子と近似している。

陳某は十日ばかり前に、二三人の貴公子と共に只一度玄機の所

に來たのである。体格が雄偉で、面貌の柔和な少年で、多く語らずに、始終微笑を帯びて玄機の挙止を凝視してゐた。年は玄機より少いのである。

この近似は果たして偶然だろうか。一九一三年三月、近代劇協會が主宰した鷗外訳の舞台「ファウスト」に、奥村は俳優として出演している。鷗外も坪内逍遙と共に顧問として関わっており、舞台初日の二十七日の日記を見ると、「帝国劇場此日より Faust を上場す。茉莉を伴ひて往きて観る。」と確認出来る。この時既に、らいてうと奥村の關係は方々で噂されている。早くかららいてうに注目していた鷗外が、奥村に全く無関心であつたとは考えにくい。鷗外の觀察眼から捉えられた奥村の姿が、らいてうの記すそれと似通つているとしてもおかしくはないと思われる。前述したように、鷗外は、『唐女郎魚玄機詩』にはつきりと残されている李近仁という名を無視し、わざわざ陳某なる人物を設定している。これは、男を奥村に見立てるための操作とも考えられるのではないだろうか。玄機をらいてうと見るならば、それより年の若い陳某はまさに奥村を彷彿とするし、風貌や表情、挙措の描写も符合する。さらに楽人としての点も、奥村が画家であつたことから同じ芸術家に設定したようにも思える。これらの類似点から見ても、やはりらいてうと魚玄機は無關係では有り得ない。

ただ、果たして玄機には、全面的にらいてうのみが投影されているのだろうか。先行論では、魚玄機モデルとしてらいてう以外は議論されて來なかつた。しかし、鷗外はらいてう一人に拘つて玄機を造形したわけではないのではないか。それよりもむしろ、らいて

うを中心とする才女、「新しい女」たちの複合体が玄機と言うべきであるように思う。さらにモデル詮索をするならば、同じく青鞥社社員であった遠藤清子（岩野清）を挙げることでもできる。この人物については尾形明子の研究に詳しい。清子は女性選挙権獲得運動での精力的な活動後、青鞥社に尽力しているが、岩野泡鳴との同棲、結婚がジャーナリズムに騒がれたことでも有名である。その注目の的となったのは、彼女が男性に対し肉体を許さない点であった。半獸主義実行者と言われるような泡鳴と、肉体交渉を頑なに拒む清子が始めた実験的な同棲生活が世間の関心を引き、一九〇九年十二月十二日の「万朝報」に「変物同士の同棲 霊が勝つか肉が勝つか」という記事が出ている。また、青鞥社入社以前にも、精神主義を貫いた故に失恋した清子は、自殺未遂を起こして報道されており、この際も好奇の衆目を集めている。才女と肉体交渉の拒否という点において、塩原事件のらいてうや魚玄機に通じるものがあり、看過し難いものがある。「魚玄機」の書かれた一九一五年には、泡鳴が青鞥社社員である蒲原英枝と関係を持ち、清子はマスコミ上で派手に離婚劇を演じている。清子の存在は良くも悪くも「新しい女」として世間から注目されており、清子が魚玄機造形の一要素となった可能性は決して低くないと思われる。

やはりらいてう一人と言うよりも、一九一五年頃の女性たちがつくる気運によって鷗外の才女への眼差しに何らかの変化が加えられ、それが「魚玄機」執筆の契機となったと考えるべきである。飛躍を怖れずに言えば、「日蔭茶屋事件」で有名な神近市子や田村俊子なども当時の気運を示した才女であり、広い意味では魚玄機の分身の一人と言い得るのではないだろうか。玄機はらいてうを核として造

られた「新しい女」たちの分身であると考ええる。

では、実際に鷗外は、「新しい女」にどのような目線を送っていたのだろうか。鷗外と「新しい女」の関係については金子幸代の論に詳しい⁸⁾。金子が指摘するように、鷗外はドイツ留学時代、「獨逸婦人会」総集会に出席し、早くから女性解放運動に関心を示している。また、性別関係なく能力ある者を認める正当な批評眼を持ち、樋口一葉や与謝野晶子を高く評価したことも有名である。そして、鷗外は一九一二年六月、『中央公論』に寄せた「与謝野晶子さんに就いて」の中でらいてうを称賛している。

晶子さんと並べ称することが出来るかと思ふのは、平塚明子さんだ。詩の領分の作品は無いらしいが、らいてうの名で青鞥に書いてゐる批評を見るに、男の批評家にはあの位明快な筆で哲学上の事を書く人が一人も無い。

鷗外と「青鞥」との関係も決して浅いものではない。妻のしげに加え、妹の喜美子も賛助員である。また、鷗外は尾竹一枝が主宰した雑誌「番紅花」にも協力している。一九一四年三月の創刊号には随筆「サフラン」を寄稿し、その後もコラム「海外通信」に、海外での女性運動を紹介する文章などを寄せている。鷗外が「新しい女」に期待の目線を送り、支援をしていたことがわかる。

しかし、「魚玄機」執筆の一九一五年前後、彼女たちに向けられた鷗外の目線には何らかの変化があったように思える。次章ではその点を見ていきたい。

三 一九一五年の『青鞥』と鷗外の視線

『青鞥』は一九一一年九月から一九一六年二月まで、計五十二冊を発行した。この期間中、最も「新しい女」が議論の俎上に載せられ、『青鞥』自体の勢いがあったのは一九一三年頃といえる。⁹⁾しかし、『魚玄機』が執筆された一九一五年の『青鞥』には発刊当時の勢いはなく、徐々に失速している。らいてうは一九一四年一月に奥村との共同生活を始めるが、経済的基盤のない奥村と家向きの仕事の苦手ならいてうの暮らしは苦しいものとなった。周知の通り、生活と経営の両立困難から事態は次第に紛糾し、一九一五年には『青鞥』の編集兼発行人が伊藤野枝に譲渡されるに至る。野枝は「無規則、無方針、無主張無主義」という新方針を打ち出して意気込んだが、悪戦苦闘の末、一年余りで廃刊を迎えることとなる。また、一九一四年から一九一五年にかけては、他の同人たちも多くが結婚、出産といった節目を迎えている。¹⁰⁾「新しい女」たちの青春時代が終わり、新たな模索への道がひらかれようとしている時期といえるが、これらの変化によって青鞥社からは人間が減り、世間で廃刊の噂が囁かれるまでに衰微していく。「この頃の社のさびしさつたらありません」(一九一五年六号)という野枝の言葉が端的にこの状況を示している。同人たちの多くがそれぞれ男性の出現により生活上の大きな変化を受け、当初の『青鞥』が持ったエネルギーは影をひそめてしまっているのである。このように、一九一五年頃を境に、『青鞥』は終焉へと向かっていく。

この終焉へのカウントダウンを、鷗外はどのように眺めたのだろうか。ここに「魚玄機」を読み解く手がかりがあるのではないだろうか。

うか。鷗外は当初、「新しい女」たちに多くの期待をかけ、見守っていた。だからこそ、一九一五年頃の下り坂になっていく彼女たちの活動を見て、何か少し論じたいような気持ちになったのではない。「男子の心情」を有し、詩の道に没頭した魚玄機は、まさに前途洋々の才女であった。しかし、最終的には陳某をめぐる痴情のもつれで破滅に至る。鷗外は、「新しい女」たちに対し「魚玄機」という一つの寓話を提示することによって、何かを受け取って欲しかったのではないだろうか。

そして、作品内でメッセンジャーの役割を果たしているのが、他でもない温庭筠の存在だと思われる。作中、温は師として玄機の才能を見守っており、最後まで玄機の理解者である。史実での玄機と温の関係は、『唐才子伝』に「復興温庭筠交遊」とある部分と『唐女郎魚玄機詩』に「寄飛卿」の漢詩が確認されるのみである。鷗外はそれを発展させ、二人をかくまで結びつけて書いたのである。温が、玄機の慈父のような役割のもとに登場しているのは、「才女」に対しての鷗外の眼差しを投影するためではないだろうか。「玄機の刑せられたのを哀むものは多かつたが、最も深く心を傷めたものは、方城にゐる温岐であつた。」とあるように、玄機の卓抜した才能を誰よりも理解していた温は、その才能を生かしきれないことを無念に思い、惜しんでいる。鷗外もまた、期待を寄せていた「新しい女」たちの才能を生かしきれない状況を、温と同じような心境で見つめていたのではないだろうか。鷗外は才女に対し、慈父のような眼差しを向け続けていたからこそ、「魚玄機」にメッセンジャーを託したのだと思われる。

なお、作品が発表されたのは『中央公論』(一九一五・七)であるが、

この号は臨時増刊で、「大正新氣運号」と銘打たれている。「大正新氣運号」の趣旨は、「明治の末年より大正の初年にかけて起つた、又は、起らうとして居る社会生活の趨勢の叙述、解釈乃至、批判を網羅しようとするにある」とあり、婦人問題として「新しい女」に関するものが掲載されている。公論（主論文）には田中王堂「平塚らいてう女史に与へて氏の婦人觀を論ず」、説苑には小野賢一郎「新しい女銘々伝」が見える。これらの論と並んで掲載された「魚玄機」は、やはり「新しい女」を讀者として想定していたと考えるべきである。また、この「大正新氣運号」に収められた、「魚玄機」を含む作品群は、「▲問題小説と問題劇」としてまとめられている。通常は、毎号「創作」または「小説」となっている部分だが、わざわざこの号では「問題小説」としているのである。これも本作品の意図を示唆するものと思われる。鷗外は「新しい女」たちに、ある問題を感じており、それが〈才女の悲劇〉に直結すると考えたのではないだろうか。そして鷗外は問題を孕んだ一九一五年時点の「新しい女」たちに、彼女たちの才能を惜しむがゆえ、警告を発したかったのである。

四 鷗外の性観から探る問題点

周知のごとく、森鷗外は作家であると同時に医学者でもある。前章までは鷗外の一面的な女性への眼差しを見てきたが、「魚玄機」を読む上では医学者だからこそその視点も欠かせない。本章では性科学言説などからその点を探ってみたい。

鷗外の性科学知識は「性欲雜説」に集約されている。これは一九〇二年～一九〇三年に書かれ、鷗外の衛生学の大著『衛生新篇』（南

江堂 一九一四年 改訂増補第五版）に収められた。内容を少し見ていこう。「性欲及春機発動」という項では、男女別に性欲発現について言及しているが、女性の「淫欲」は男性よりも遅く発現すると説明され、「魚玄機」に一致している。「男子ノ性欲抑制」「女子ノ遏欲」は性欲抑制についての項である。ここで鷗外が、男性のその困難さに比べて女性に性欲に悩まされるものでないと再三主張しているのは興味深い。そして、注目すべきは「月経」「月経ハ全神経系ニ影響ス」「終経期」の項である。ここで特徴的なのは、ひたすら「障礙」ということが強調される点である。冒頭で「近世女子月経ノ障礙多キガ為ニ婦人科医中英国ノ Emmet 等ハ無障礙ノ月経ヲ以テ破格ト為スガ如ク甚シキニ至レリ障礙ハ恐ラクハ神経系ノ感受性ノ昂上ニ因スルナラン」と述べた後から、「終経期」の最後まで、一貫して月経に関して生じる悪影響が説明されるのである。

全身障礙ハ精神上ナル者多シ感情ノ興奮シ易キコト、久シキニ瀾ル興奮、啼泣、憂悶、業務ヲ嫌フコト、疲労ノ感、事ニ当ル時ノ急遽ナル疲憊、鬱狂性抑圧ノ往往生ヲ厭ヒ死ヲ願フ程度ニ至ルモノ皆此ニ属ス其ノ真ノ精神病ニ算入スベキモノハ所謂月経性精神病 *Das menstruale Irresein, die Menstruationspsychose* ニシテ月経ト共ニ反復シテ起リ或ハ躁狂トナリ或ハ幻覚多キ鬱狂トナル

現在の性科学的言説と比べ、当時いかに弊害が誇張されているかわかる。精神の不安定さなどといったものが、安易に女性と結びつけられる傾向が現在よりもはるかに顕著であったことが想像される。

大正初年の性科学言説やメディアに目を向けても、やはり同様のことが言える。注意を引くものとしては、青鞥社とも縁の深い小倉清三郎が訳したハヴェロック・エリスの『性的特徴』（丁未出版社一九一三）がある。目次には「女の官能に於ける週期」「女の感動性」などという項目が見え、女性が月経周期に支配されやすいという認識が強調される。さらにその中の小見出しには「女は生れ付の病人であるといふ説」「女には情が病の原因となる事が多い」「女の痙攣的傾向」「破壊的傾向」などがある。やはりここでも、女性の精神的不安定さが生理的な現象に基づいて説明されており、それが女性の気質とイコールになっているのである。そして鵬外の作品にもまた、この女性性観が垣間見える点があるのではないか。「魚玄機」にも、まさにこの精神的不安定さが描きこまれている。「或る夜玄機は例の如く、灯の下に眉を覺めて沈思してゐたが、漸く不安になつて席を起ち、あちこち室内を歩いて、机の上の物を取つては、また直に放下しなどしてゐた」という描写、そして「温言を以て緑翹を賺す陳の声が歴々として耳に響くやうにも思はれて来る」という妄想にとらわれ「震ふ声で詰問」し、衝動的に緑翹を扼殺する場面などヒステリックである。

医学者としての鵬外は、自らの「性」から生じる「馴らして抑へ」るべきものについて、殊の外問題意識を持っていた。鵬外は男性の性欲問題について「セタ・セクスアリス」（一九〇九・七）などに書いている。当時の知識人階級の青年たちにとって、自らの性欲をどう扱っていくかという問題は不可避のものであった。「セタ・セクスアリス」には、性欲によって墮落して退学になっていく学友たちの姿が書かれ、最後にはこうある。

世間の人は性欲の虎を放し飼にして、どうかすると、其背に騎つて、滅亡の谷に墜ちる。自分は性欲の虎を馴らして抑へてゐる。羅漢に跋陀羅といふのがある。馴れた虎を傍に寝かして置いてゐる。童子がその虎を怖れてゐる。Brahmaとは賢者の義である。あの虎は性欲の象徴かも知れない。只馴らしてある丈で、虎の怖るべき威は衰へてはゐないのである。

葛藤を経て、虎を飼ひ馴らすに至つた鵬外の感想であらう。ただ注意したいのは、「虎の怖るべき威は衰へてはゐない」という点である。鵬外は、性欲を抑制して滅却せよと言うのではない。医学者としての鵬外は、人間の動物としての本能を厳然と存在するものとして認めている。性欲を人間の生理の問題として認めたうえで、正しく対処すべきだと考えている。自らの「性」から生じる弊害は有つてしかるべきものであるが、「放し飼」にしてはならないし、また、「虎を怖れてゐる」童子のままでいいけない。

これまで、鵬外は男性の肉体的弊害については多くを示してきたが、ここで初めて女性の肉体的弊害についての問題を提起したのではないだろうか。自らの性の問題に無自覚な玄機は、いつまでもそれを飼ひ馴らすことができないために、放し飼いになった女性性に振り回される。鵬外はこのような玄機を描くことで、「性」の修養なるものの重要性を示唆していると読むことも可能であり、それは才女たちへの警告でもあり得るように思う。リアリストとしての鵬外は、才女の肉体という面に目を向け、そこにある危うさを見てゐるのではないだろうか。

おわりに

鵬外には、才女に向けた二つの眼差しがあつたように思う。まず温庭筠という存在が物語っているように、玄機の才能を高く評価し、なんとか生かしてやりたいという親心のような眼差しが看取できる。玄機を写す鵬外の筆には、多分に愛惜の情を感じる。しかし一方では、鵬外は玄機を堕ちていく女性として容赦なく描いている。医学者としての目で、当時の医学的見地から見た女性のマイナス面を強調している。

作品からは、魚玄機の破滅という結末を通して、自らの〈性〉に足をとられることなく身を律して本懐を遂げよ、という隠されたメッセージを受け取ることができる。そしてこの警告は、才女能力を評価し、惜しむゆえのものであり、愛情と表裏一体のものといえるだろう。文学者の先輩としての慈父のような面、また医学者の立場にある冷静な面。この二つの眼差しは、鵬外が「新しい女」に対して向けた眼差しと重なるものだと思う。史実を通して、寓話として置かれた、魚玄機の破滅という結末は、現実生きる「新しい女」たちに、同じ轍を踏ませたくないからこそこの提示としては読めないだろうか。

注(1) 作品の末尾には執筆時の参照文献が付されており、その数は合計二十八部に及ぶ。しかし、早くから尾形氏が指摘しているように、鵬外はこれら全ての文献を博搜したのではないと考えられる。東京大学図書館の鵬外文庫には『唐女郎魚玄機詩』『温飛卿詩集』『全唐詩』の三冊のみが見られる。『唐女郎魚玄機詩』の巻末には附録「魚玄機事略」が付され

ており、他の史料からの抜抄を読むことが出来る。

(2) 「今日喜時聞喜鵲／昨宵燈下伴燈花／焚香出戸迎潘岳／不羨牽牛織女家」

(3) 辛島驍『魚玄機・薛濤』漢詩体系第十五卷（集英社 一九六四・九）

(4) 鵬外が一枝に寄稿した「サフラン」の脱稿が、らいてうと奥村の逃避行の一月後にあたることからも、鵬外がここに着想を得たというのは十分有り得べきことである。

(5) 例えば、玄機と采蘋の關係に当てはめると、女に捨てられた玄機が一枝、工人の男と逃げた采蘋がらいてうということになり、史実とうまく一致せず矛盾が生じる。尾形仿はこの逆転を「鵬外が当事者たちへの顧慮もあって、あえて雷鳥らの場合を裏返しにして状況設定を試みたものではなかったろうか」と説明しているが、らいてう、一枝の双方がどちらもモデルであるとも考えることも出来よう。

(6) 尾形明子『自らを欺かず―泡鳴と清子の愛』（筑摩書房 二〇〇一・四）

(7) 一九〇九年七月二十九日の「二六新報」に「ハイカラ美人の入手」という記事で清子の自殺未遂が報じられた。伊藤整は「泡鳴と遠藤清子の実験同居―日本文壇史第六十三回」『群像 一九六六・十二』の中で、この報道について以下のように触れている。

政治運動によつて名を知られてゐたために、彼女の投身自殺事件は、記事として大きく扱はれた。口の悪い男たちは、遠藤清子は実は男性だつたとか、性的不具者だつたなどと言つた。

(8) 金子幸代『鵬外と〈女性〉―森鵬外論究』（大東出版 一九九二・十二）

(9) 一九一三年六月に『太陽』が「近時之婦人問題号」を、同年七月に『中央公論』が臨時増刊の「婦人問題号」を出しており、「新しい女」がこの時期喧しく議論されていたことがわかる。

(10) 一九一四年には遠藤清子の出産、長沼智恵子、小林哥津、原阿佐緒、

三ヶ島霞子、尾竹一校らの結婚があり、一九一五年には野枝、一枝、上野葉、らいてう、哥津の出生、また、清子の離婚騒動がある。

(11) 「男子ノ性欲抑制」には、「二十四歳乃至三十六歳ノ男子ハ其性欲上ノ能力最モ盛ニシテ若シ寧欲ヲ敢テスルトキハ多少ノ異常ヲ感ゼザルコト能ハズ」とあるのに対し、「女子ノ過欲ハ之ヲ男子ニ比スルニ其実例甚多シ生涯婚嫁セザル女子ニシテ私通ヲ敢テセス又恐ラクハ独淫ノ惡癖ニ陥イラザルベキモノ即是ナリ而シテ此多数ノ女子ノ健全ナルコトハ復タ疑フベカラズ」とある。この前には「女子ノ過欲ノ影響ハ古来之ヲ説クモノ多クシテ就中荒誕無稽ナルモノモ亦少シトセズ」とあり、古代、中世にあった、いかに女性の過欲が体に毒かという説を引き、これを真つ向から否定している。

受贈雑誌(五)

上智大学国文学論集

上智大学国文学会

昭和女子大学大学院日本文学紀

昭和女子大学

要

女子大國文

京都女子大学国文学会

叙説

奈良女子大学国語国文学会

人文学報

都立大学人文学部国文学研究室

親和国文

親和女子大学国語国文学会

成蹊国文

成蹊大学文学部日本文学科学研究室

成城国文学

成城国文学会

成城国文学論集

成城大学大学院文学研究科

清心語文

ノートルダム清心女子大学日本語日本文学会

清泉女子大学大学院人文科学研究

清泉女子大学大学院人文科学研究科

究科論集

究科

全国文学館協議会紀要

全国文学館協議会

専修国文

専修大学文学部国語国文学会

高岡市万葉歴史館紀要

高岡市万葉歴史館

高岡市万葉歴史館叢書

高岡市万葉歴史館

玉藻

フェリス学院大学文学会

近松研究所紀要

園田学園女子大学近松研究所